法面保護工・治山利用種

【問題種】

ハリエンジュ、アカシア類、イタチハギ、中国産コマツナギ、カモガヤ、シナダレスズメガヤ

【生態】

〇ハリエンジュ

北米東部原産のマメ科の落葉高木。治山用としてはげ山に植栽されたり養蜂産業における蜜源植物として植栽されたりしているが、風にも弱く倒木するため治山の効果が弱く、植栽地では遷移が進まないため、生物多様性に影響を与えている。

群落を形成するハリエンジュ

〇アカシア類

マメ科の常緑高木。ギンヨウアカシア、フサアカシアがある。

野外に逸出するフサアカシア

〇イタチハギ

アメリカ原産の落葉低木。大正初期に観賞用として輸入され、戦後は植生工や治山に用いられている。

〇カモガヤ

ヨーロッパ～西アジア原産のイネ科の多年草。明治初期に牧草として輸入され、戦後植生工に用いられた。花粉症の原因となる。

○シナダレスズメガヤ

南アフリカの乾燥・半乾燥地域の草原に自生するイネ科の多年草。

植生工に用いられている。日本各地の河川に侵入し、大群落を形成して流下する砂を受け止めるため、砂州を形成するなどの河川環境を大きく変化させる要因となっている。

河川敷に広がるシナダレスズメガヤ群落

【問題点】

植生工・治山用としては速やかに在来種に遷移する種が望ましいが、上述の種は遷移が進行せず、分布が拡大してゆく。伐倒などの処理によっても駆除は困難。植生工に郷土種と称して外国産のヨモギ、ススキ、コマツナギ、ハギ類、メドハギを使用する例が多いが、遺伝的な問題を考えると使用は避けるべきである。外来種であっても植生工としての目的を果たし、周辺に逸出せず、また在来種に置換する種であれば問題はないと考えられる。

【侵入経緯と県下の分布状況】

いずれの種も県下に広く分布している。

【加害状況】

いずれの種も強い繁殖力をもち、在来種への影響が大きい。

シナダレスズメガヤが河川敷に繁茂した場合、地表付近を被陰することにより、光要求性の高いカワラノギク等の河原固有植物を衰退させると考えられる。また、増水時に水流を妨げることによって株の下流側に砂を堆積させ、河原固有植物の生育場所が失われる可能性が考えられる。

イタチハギが用いられた法面ではイタチハギの繁茂が著しく、他種を圧倒し、遷移が進まない。水位変動の激しいダム湖の法面にも生育し、単純な植生景観を構成している。

【対策事例】

○ハリエンジュ駆除の事例

多摩川

明治以降水源地林荒廃対策としてハリエンジュを植栽してきたため、河原特有の草原植物群落であった場所がハリエンジュ群落におきかわり、また治水上の障害に

なっていたことから、治水対策、れき河原特有の生物相の回復を目標としてハリエンジュ樹林の除去を実施した。

実施主体は永田地区植生管理計画検討会（国土交通省が主催し、研究者、自治体、地元市民団体により構成される）。

猪名川

洪水後、河川敷で群落を形成していたハリエンジュが多数倒れたため、治水および生物多様性保全の観点から全個体を地下部より掘りおこして除去した。